

第四回星野立子新人賞

「初筑波」

大西 朋

風邪はやりはじめの町のぬるき風
玻璃戸あり障子あり日の入りにけり
遠目にも山茶花こぼれ人気なく
松の枝をくぐりて松へ小春かな
マフラーにマスクに家のにほひかな
寒波来ぬメタセコイアの赤く降り
畑のもの抜きに出てをり初筑波
みづうみの風の咆哮出初式
生きてゐるうちもつめたき海鼠かな
草氷柱短し栗鼠の眼の黒し
声のよく響く部屋なり隙間風
大寒の轍に刺さる松葉かな
小箒で均す苔の辺春隣
白梅を離れて鶴の歩みけり
アロエ咲く初午近き佃島
啓蟄やぐにやりと曲がるヨガ教師
ポップコーンくるくる回る日永かな
霞みたる江ノ島鳶の声聞かず
石段を埋めし砂や百千鳥
初音して見上げてをれば目に埃
春塵や鉄扉を高く領事館
蜂の巣のまはり微かに震へをり
耳搔いて花びら落つる寺の猫
入学のやや内股にハイヒール
夏蜜柑小舟揺れつつぶつからず

筍の油湿りや少し長け
にはとりの掠れ鳴きせり花うつぎ
白き花散りしく町や更衣
口開けて石橋渡る鴉の子
電球を淋しくしたる蜘蛛の糸
藤棚にかぶさる葛や朝曇
万緑や火花の如く雀蜂
雨蛙跳ぶ金色の手足かな
病葉や照り雨に目を細めたる
草を這ふ山蛭の頭のほの赤し
舞台より放り出さるる金亀子
かはほりのきゆつと縮みし眼かな
同じ名で違ふ家々鳳仙花
魚が身をこする砂地や初嵐
葉月潮髪黒々と老いんとす
町の灯のともりはじめし野分かな
新松子身を湿らする海の風
足元に影を生みたる秋の蝶
黒葡萄雨に深紅の汁こぼす
木の実降る鳩のマークの引越し屋
大粒の甘納豆や秋濁
秋風や詰襟の子ら西口に
萎れたる朝顔色の濃きままに
飛び石の真中くぼみて秋の声
月明に光りし鹿の耳小さし